



われらの子ども
米国における機会格差の拡大
ロバート・D・パットナム 著
柴内康文 訳
創元社 (17年3月) 3,700円+税 / 384ページ

一人
一冊

評者



津田塾大学
学芸学部 教授
西川 賢

民主主義への脅威となりうる 社会階層の分断

わが国では、「米国は格差社会である」という言説を見聞する。格差社会とは何なのか。よく指摘されるのは、上位1%の超富裕層が国全体の富の24%を占有していることなどである。これは「所得の不平等」と呼ばれるものである。

対して、ハーバード大教授ロバート・パットナムが本書で取り上げるのは、どのような出自の人間であっても、自らの努力と能力で社会移動を達成することが可能かどうか、いわゆる「機会と社会移動の平等」と呼ばれる問題である。本書の主張は、現代の米国で「機会と社会移動の平等」が損なわれ、深刻な問題が生じているというものである。

1950年代の米国では、社会階層を超えた通婚・交際が日常的に行われていた。そこでは富裕層と労働階層の子どもが同じ公立学校に通学し、お互いの境遇を知り合う状況にあった。貧しい家庭に生まれた他人の子どもに対しても、援助の手を差し伸べる大人が存在した。そうすることで、下流層に生まれた子どもが上層へと社会移動し、自分より裕福な家庭に生まれた子どもを追い越し、立身出世すること（アメリカ

ン・ドリーム）が可能だったのである。

21世紀になると、そのような光景は一変する。現在の米国において、アメリカン・ドリームを実現することは不可能ではないにせよ、非常に困難になっている。社会階層の分断が進んだからである。

上流階層と下流層は同じ都市に住んでいたとしても、居住地域がまったく異なっており、ライフスタイルも対照的である。たとえば、上流階層は高学歴同士で通婚する傾向にあり、社会階層を超えて通婚することはまずない。上流階層の親は教育熱心な傾向にあり、子どもが立身出世していきけるだけの物理的・精神的援助を与えることができる。これに対して、下流層の家庭は薬物問題や犯罪などで崩壊状態にあり、下流層の子どもが高等教育を受けたり良い職にありついたりする機会が非常に限定されてしまっている。かつてとは異なり、下流層の子どもに援助の手を差し伸べる者もいなくなってしまう。

著者は、「機会の不平等」が増大していることで経済成長が損なわれ、疎外された人々が民主主義にとって潜在的な脅威になるリスクが高まっていると警告する。

いったい「平等な社会」とはどのようなもので、それを実現することは可能なのだろうか。こうした課題に興味を持たれている方々に一読をお勧めする。